



「女子高生・車座フォーラム 2020」12月26日（土）にオンライン開催が決定

新型コロナウイルス感染拡大を受け、本年度はオンラインでの開催を決定しました。すでにポスター、チラシなどで告知している開始時刻、内容等に変更がありますのでご確認ください。なお、京都大学の新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う活動制限のガイドライン <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/foundation/coronavirus/> における対応レベルが4になった場合は中止とし、HP 上でお知らせします。

京都大学男女共同参画推進センターでは、京都大学の学生生活や研究者の仕事を知ってもらおうと「京都大学を知ろう 学生・研究者と語ろう」を企画しています。フォーラムでは、理系・文系それぞれにどんな研究分野や領域があるのか、なぜ今の分野を選んだのか、といった大学進学に関わる話をはじめ、試験勉強、進学後の大学生活、研究の面白さや苦労など、さまざまなテーマについての疑問に、学生や研究者がお答えします。保護者の方々の疑問にも学生がお答えします。

参加希望者は下記 URL よりお申し込みください。

日 時 2020年12月26日（土）9：30～12：30
（9：00よりZoom接続開始）

会 場 オンライン（Zoomにて開催）

※先着順、事前申し込みが必要です

参加費 無料

参加条件 以下のすべての条件をみたしていること

- ・Zoomでの参加ができる
- ・Zoom接続テストに参加ができる
- ・パソコン、タブレット、スマートフォンのいずれかを持ちインターネット環境が整っている
- ・女子高生・保護者、複数での参加の場合、それぞれの機器での参加ができる
- ・原則としてカメラ対応ができる機器で参加ができる（グループワークではカメラをオンにしての参加をお願いします）

※詳しくはこちらをご覧ください

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/rooting/kurumaza/>

募集定員 女子高校生 100名程度
保護者 50名程度（先着順）
申込方法 男女共同参画推進センター
車座フォーラム申し込み <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/rooting/kurumaza/>
申込期間 2020年9月23日（水）9：00
～11月20日（金）17：00まで

プログラム

9：00～	Zoom 接続開始
9：30～9：55	フォーラム開始 開会の挨拶 本日の概要説明 京大体験型海外渡航支援制度 ～鼎会プログラム「おもろチャレンジ」～動画配信
9：55～10：00	休憩
10：00～11：30	グループワーク (保護者は交流会に参加)
11：30～11：35	休憩
11：35～12：10	まとめの全体会
12：10～12：30	入試説明
12：30	閉会





コロナ禍と子育て世帯

育児をしながらの在宅勤務 ― 休園・休校期間における保護者の取り組み ―

この3月以降、突然の小学校の休校や保育所等の利用自粛要請によって、保護者は、様々な対応を迫られました。その中でも在宅勤務された方々にお話を聞いてみました。

○どうしても在宅ができない等の理由がなければ利用自粛を、との依頼が保育所・学童クラブからありました。在宅勤務は可能な環境でしたが、実質的に業務が思うように進まないことを理由にして利用自粛を解いていいものか悩み、配偶者と話し合い、結局、自宅保育を続けました。夫婦共に在宅勤務のため、リサイクルショップで適当な机と椅子を購入するところから開始しました。案の定、家がすぐ汚れる、三度の食事の用意等、家事の負担は増えました。また、子どもの声や遊びの音が大きく、仕事を進めるには工夫が必要でした。うるさい！と怒るのも何だか違うように思い、かといってテレビやゲームの時間制限は譲れず、一日の時間割にやったことをチェックする欄を設けるなど、子どもとのルール・ルーティン作りをしました。そのうち、会議中に子どもが声を出しても気にならない雰囲気になってきたこと、子どもも親の状況をみて遊び方を変えてくれるようになったこと、普段ほとんど家にいない配偶者との間で家事分担が進んだことなどから、5月半ば頃になって、ようやく少しずつ楽になりました。ただ、学校再開後、子どもは学校に疲れている様子で、学習のスピードアップはとてもしんどいと感じます。今はそれが心配です。

○配偶者が医療従事者であるため、1人で保育をしながら在宅勤務をしました。15分おきに子どもが「見て！」「これすごいでしょ？」「一緒にやろう？」と話しかけてきます。パソコン画面を見ながら「すごいね」「また後でね」という返事をするのもあれば、「うるさい！」「頼むから、仕事をさせて！」と本音が出てしまうこともあり。その度に、寝顔に向かって、今日ごめんね、と謝る日々でした。また、おもちゃの取り合いなどの子ども同士の喧嘩も増え、親も子もイライラしました。医療の現場で仕事を終えて帰ってくる配偶者に、家での小競り合いの不満を漏らすのも気が引け、在宅勤務と保育の両立について夫婦で話し合うことは、ほとんどありませんでした。そのうち、自分の業務時間は15分の積み重ね、と思うことになりました。考え方を変えることで、仕事の中断にストレスを感じなくなり、少しでも時間があれば集中してやろう、と前向きに思えるようになりました。ただ、それだけでは、業務が回らず、子どもが寝ている早朝・深夜に仕事をしたり、短時間、保育園や学童クラブを利用したりしました。



緊急事態宣言にかかる実態調査の報告では、子どもを持つ研究者の多くが在宅勤務を通常時も希望しているものの、緊急事態宣言後の家事・育児の負担は女性の側に偏る傾向があったことなどが報告されています（注1）。

望むと望まざるとにかかわらず、育児をしながらの在宅勤務を強いられた今回の事態につき、社会学を専門とする落合 恵美子教授（文学研究科）は、次のようなコメントを寄せてくださいました。「日本政府の政策は感染防止と経済の二極しか見ないもので、経済ではなく生活を回すことこそ最優先という当たり前のことを無視したものでした。子どもや親たちへの甚大な影響も考えず決断した全国一斉休校が最たる例ですが、対策のゆるさでは日本と似ていたスウェーデンでは休校はほとんどしませんでした。すべての政策のジェンダー的効果を予測してから実施を決めるのが定着しているからだということです。他方、わたしたちが実施した緊急調査（注2）では、在宅勤務になって家族関係が良かったという人が、子どものある女性の38%、子どものある男性の47%にのびりました。絶対的に在宅時間が短すぎる日本の大人には革命的な実験だったと言えます。ぜひ良い方に変わるきっかけにしてほしいです。」

他方で、業務の性質上在宅勤務を選択できない保護者には、子どもを密な保育所等に預けることを避け、利用自粛にも協力したいのに、それができない辛さもあったと思われます。本学では、臨時休校等に伴い子の養育等を行う者がいないこと等を条件とする特別休暇が新設されたほか（注3）、ベビーシッター育児支援割引券についても、特例として使用枚数制限等が緩和されています（注4）。

在宅勤務と特別休暇の取得の選択ができる保護者も、業務の性質や仕事・育児についての考え方、家庭環境などは

さまざまで、どちらが望ましいか一概にいえるわけではありません。

このような異例の状況においては、解決策が簡単に見つかるものではありません。しかし一ついえることは、問題やモヤモヤを一人で抱え込まず、周囲の保育士や職場の人びとに相談したり、『たちばな』のような媒体を通して間接的に共有したりしていくことが大事だということです。当事者も「身勝手な相談かもしれない」と臆することなく口を開き、それを受け止める側もまずは話だけでも聞いてみる、こうしたことの積重ねが社会への働きかけにもなるとの意識をもっていても、いいのではないのでしょうか。

新しい生活様式への急激な移行と子どもの発育

新型コロナの影響により、ソーシャルディスタンスやオンラインを介したコミュニケーションに一変した社会に、子どもを抱える世帯も戸惑いました。このような環境変化と子どもの発育との関係について、認知科学を専門とする明和 政子教授（教育学研究科）にお話を聞いてみました。



明和教授のお話

ヒトという生物は、進化の過程で身体を介したコミュニケーションに適応しながら今あるような脳と心を獲得してきました。他者の笑顔、対話によってもたらされる自己肯定感や動機づけは、それまでに蓄積された他者との対面での身体を通じた経験を基盤としています。とくに、幼少期に抱っこされ、笑いかけられ、声をかけられる経験を豊かに得ることは、ヒトの脳と心の発達に不可欠なものです。こうした経験は、身体の外側から受ける刺激（相手の表情や声）と身体の内側に沸き立つ感覚（セロトニンやオキシトシンなどの脳内物質）を結びつけて学習、記憶すること（連合学習）につながり、他者とのコミュニケーションを動機づけます。この記憶がしっかりあると、身体を介しないコミュニケーションでもかつての記憶が呼び覚まされ、安心感を得ることが出来ます。例えば、この春に様相が一変した大学においても、それまでの大学生活の対面で培った教員や友人との間に心地よいコミュニケーションの「記憶」がある学生は、バーチャルなやりとりであってもそのときの親密な関係と呼び覚ますことができます。その点で今もっとも懸念されるのは、そうした記憶経験をまだ得ていない、新入生の心の問題です。

新型コロナは、バーチャルなコミュニケーション様式を私たちの日常に加速度的に浸透させました。今後、感染拡大が終息しても後戻りすることはないと思われず、我々は身体を持っている生物であるという前提を忘れず、子どもの脳と心を育む環境の本質について再考する必要があります。

この点で懸念していることのひとつが、マスク着用の日常が乳児の脳と心の発達に与える影響です。生後8か月頃から、乳児は他者の多様な表情を経験しながらその背後にある感情を理解するようになります。脳の発達において環境の影響をとくに受けやすい特別な時期を「感受性期」と呼びますが、この時期は視覚野の感受性期にあたります。今、「新しい生活様式」が求められ、乳児が接する他者の表情はマスクで覆い隠されています。こうした日常が長期的に続くと、乳児の脳の発達に何かしらの影響が起る可能性は否定できません。透明素材のマスクをできるだけ着用するなど、感染対策との両立を工夫していく必要があります。

保育の現場には、脳の感受性期にある子どもたちの脳と心を考える上で重要かつ有効な経験知が豊富にあります。今回の危機を前に、どのような保育実践が可能かを懸命に模索し続けておられると思います。保護者も一緒になって、この問題に対する積極的な理解と協力をお願いしたいところです。

（文責 育児・介護支援事業 WG 専用アドレス：ikwg@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）

注1) 「緊急事態宣言による在宅勤務中の科学者・技術者の実態調査結果報告」男女共同参画学協会連絡会（2020）、https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2020/survey_covid-19/index.html

注2) 講談社現代ビジネス ismedia（2020年5月14日）睡眠時間激減…在宅勤務で「子どものいる女性の負担増」という現実：在宅勤務緊急調査報告（1）<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/72531>；講談社現代ビジネス ismedia（2020年5月15日）コロナ調査でわかった「家族関係が良くなった人、悪くなった人」：在宅勤務緊急調査報告（2）<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/72551>

注3) 「新型コロナウイルス対応にかかる特別休暇の新設等について」（令和2年3月2日通知）。詳細は、総務部人事課労務管理室までお問い合わせください。

注4) 小学校の休校等の場合に、1日につき5枚（合計11,000円相当）まで利用できるなどの特例が認められています。<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/wordpress/wp-content/uploads/bs20200511.pdf>；ベビーシッター利用育児支援の制度については、以下をご参照ください。<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/babysitter/>

令和2年度第2期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

令和2年度第2期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、21名（女性13名、男性8名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは育児又は介護のために十分な研究・実験時間が確保できない研究者に対し、研

究又は実験業務（注：事務及び教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を助成するものです。募集は年2回です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

センター長退任のご挨拶

2006年に科学技術振興調整費により設立された「京都大学女性研究者支援センター」の活動を学内外に知っていただくため広報の一環として発行を始めたニュースレター「たちばな」は、今回をもって92号となりました。

この間2014年には、男女共同参画推進体制の整備・再編により、新たに男女共同参画推進本部が設置され、「京都大学女性研究者支援センター」も「京都大学男女共同参画推進センター」と改称されましたが、「たちばな」がその広報誌であることは今も変わりません。

私は、センター設立以前の2005年7月には総務担当理事の下に設けられた男女共同参画企画推進プロジェクトチームに参加し、「京都大学男女共同参画企画推進委員会」の設置に働き、この中の活動として、前述の科学技術振興調整費の申請に携わりました。その後、この委員会は「京都大学男女共同参画推進アクション・プラン」に向けて（提言）をまとめて2008年には廃止されました。しかし、センター設立当初には女性研究者支援推進室長、次年度からセンター長、さらに2013年8月から男女共同参画担当の副学長、2014年4月には男女共同参画推進本部長、2014年10月からは担当理事・副学長として、実に15年余にわたって本学の男女共同参画に関係して参りました。長い間、皆様からの御支援、御協力、さらには御声援、本当に有り難うございました。いよいよこの号をもって、私の本学での任務を終えることとなります。

「京都大学男女共同参画推進センター」では、待機乳児保育、病児保育、ベビーシッター利用育児支援、お迎

え保育、研究・実験補助者雇用支援、メンター制度等による相談体制整備、新入生等を対象としたジェンダー教育、女子高校生に対する車座フォーラムの開催や女子高校生応援大使の派遣など、センターの活動は多岐にわたります。しかも、それらの対象も今では女性研究者だけではなく、事業によっては男性研究者や学生、職員にも広がっています。これらの事業は、5つのワーキンググループの先生方の御尽力により運営されており、それらを支えているのがセンターの職員の方々です。多くの皆様の力によって、これまで継続して行うことができました。

基本的な運営資金は大学から支給されていますが、事業によっては総長裁量経費や京大卒業生財界トップによる総長支援団体である「鼎会」からも御提供を受けております。この場を借りて、お礼申し上げます。

10月からは新執行部の新たな理事・副学長のもとでセンターの活動が継続されていくことになると思いますが、これまでと変わらぬ御支援をお願いすると同時に、より良い活動のために貴重なご意見をいただけるようお願い申し上げます。

本当に長い間、有り難うございました。



男女共同参画担当
理事・副学長 稲葉 カヨ

連載：研究者になる！－第19回－

農学研究科・講師 鬼頭 弥生

●悩み抜いてたどり着いた研究職

高校生時代は吹奏楽部の活動に明け暮れていました。他のメンバーとともに部内の意思決定にも関わり、しばしば起こった揉め事に頭を悩ませたこともありました。当時は自覚していませんでしたが、揉め事の最中には、友人や先輩それぞれの行動原理が気になったものです。すでに人の認知や意思決定に興味があったのかもしれません。学業面では、食や環境、生物学に関心があったため、高校の文理選択時には迷わず理系を選択しました。漠然と研究職に就きたいという希望も抱いていました。こうした関心と希望のもとで京大農学部を受験し、食品生物科学科に入学しました。

自分自身の興味関心に向き合うきっかけが訪れたのは、大学に入学して半年後の2001年9月10日。日本で初めてのBSE牛が発見され、その翌日には関連記事が紙面に並びました。BSE問題に関して、当初は発症のメカニズムや健康リスクについて知りたいと思い、専門家による科学的な解説等の情報を積極的に収集しました。しかしながら、私が科学的情報よりも強く関心を抱いた対象は、一般市民の意識や行動と、それをめぐる専門家の言説でした。その段階で、自分自身が、食品そのものよりも、食をめぐる人の行動や社会の仕組みを追究したいのだということに気がきました。BSE牛発見の翌日は、アメリカの9.11同時多発テロが起こった日。価値観を揺さぶられるような当時の社会情勢のもとで、物事を相対的かつ客観的にみることが重要だということも強く感じました。

その後悩んだ末に、2年進学時に総合人間学部へ転学部し、文化人類学分野に身を置き、食品流通過程における人間関係と商品の価値形成について研究することになりました。漠然とした像でしかなかった研究職について、より具体的に考え、それをめぐる覚悟をしたのは、修士課程に進学した直後です。具体像を結ぶなかで、農や食をめぐる社会問題に即して研究・議論し、提言していく学問領域で研究者を目指したいと考えようになりました。そして、再び悩んだ挙句、農業経済学分野に転向しました。

●国内外の農業・食料に関わる問題に貢献したい

私が所属した研究室では、農業経営学を基礎としながら、農業経営に影響を及ぼすフードシステムや、食品安全等に関わる制度を扱い、農業・食料分野の経営学の発展を図っていました。かつ、異分野の手法や知見を積極的に採り入れる空気もありました。また、恩師をはじめ、女性研究者・院生を多くかかえる研究室でもありました。それは、研究者を目指すうえで大変心強いもので

した。私は異動を経て再びその研究室の一員となりましたが、そうした気風は今も引き継がれています。現在、フードシステムについては、さまざまな論点が見られ、多様なアプローチがなされています。その中で私は、フードシステムはその各段階の人や組織の意思決定や行動によって成立し変容しているとの考えのもと、彼ら／組織の意思決定、行動の実態やメカニズムの解明を研究テーマとしています。農業経済学の分野に所属していますが、社会心理学の理論や手法を採り入れ、消費者の食品選択行動や風評行動の背景にあるリスク認知を調査し、どのようにリスクコミュニケーションを進めるべきかを研究してきました。最近では、持続可能なフードシステムを念頭において、生産から消費に至るまでの各段階にある人や事業者が、どのように意思決定を行っているのかについての研究にも取り組んでいます。食をめぐる人の行動や社会の仕組みを明らかにして、新たな知識を生み出すことによって、社会に何らかの貢献ができればといつも考えています。

●完璧主義を脱却し、時間をうまく管理する

研究と生活のバランスを保つため、時間を上手に管理するよう心がけています。ですが、きっちり管理するのではなく、完璧主義を脱却し、自分自身のダメなところも自覚しながら、時には自分にあまくするようにしています。人は、最良の結果や完璧な結果でなくても満足できるもの…とはいえ、研究と教育においては最良を目指しがちになってしまうので、家事については心地よく満足できればよい、ということにしています。

今後の目標は、長い時間軸で考えながら、研究を通して社会に貢献すること。教育においても、将来社会で活躍する学生達に、学術面に限らず何らかのプラスの影響を与えることができればと思います。異なる領域の研究にも興味をもって学び、自分と異なる見解にも耳を傾けてその立場で考えてみることを、自分の価値観が偏っていないか絶えず考えてみることを常に心に留めて、広い視野をもって自身の立場を問い直しながら、研究を続けたいと思っています。

編集後記

今回の連載コラム：みんなどうしてる？はコロナ禍における「育児と在宅勤務について」の特集号です。専門家の先生による子どもの発育に関するお話も掲載していますので是非ご覧ください。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>